

# 大人のチーム

高岡短期大学 加藤敏弘  
(1987年頃執筆)

いわゆる大人のチームでありたいと思う。しかし、大学生といえどもなかなかうまくいかない。現代の若者論で片付けてしまうことも出来るが、それではあまりにも情けない。

「大人のチームなんて男子でも無理だよ。」と言われる時代に入り、やっぱりそうかと思う反面、「だからこそ、大人のチームであることが必要なんじゃないか」と思う。

勝っても負けても、その時がこれからの人生にどんな意味があるのかを考えていけるような深い経験をさせてやりたい。普通に生活をしていて身体の底から震えがくるような感動や緊張感はなかなか得られない。だからこそ、スポーツが社会のなかで必要とされているのだし、そんな感動や緊張感が得られるような白熱したゲームを実現するための努力が必要である。

そもそも大人のチームって何だろう。

雰囲気だろうか？

考え方だろうか？

素行だろうか？

全てのような気がする。

それじゃあ、社交ダンスのようになってしまうのか？いや、違う。

人間の闘争本能と理性がぶつかりあって肉体が異常に興奮する。自分を自分でコントロール出来たり出来なかったりする喜びや悲しみが感動となってたち現れる。そのとき洗練された素行と言動が雰囲気となって現れ、チーム全体が調和のとれた状態になったとき、いわゆる大人のチームといえるのではないか。もちろんその根底には、哲学が必要だ。

和して同ぜず。個人主義の上に成り立ったチームでありたい。

## < 解説 >

この文章は、私がかつて勤務していた高岡短期大学で女子チームの指導にあっていた頃書いたものです。その当時使っていた NEC の 9801 シリーズのパソコンに入っていたデータの中からおよそ 19 年ぶりを見つけました。

「大人のチーム」は、今年（2006 年）3 月筑波大学を退職された私の恩師である武井光彦教授が私の学生時代、つまり今から約 25 年前によく口にされていた言葉です。ということは、私が学生時代の私たちのチームはまだ子どものチームであったのだと思います。

最後の一文「和して同ぜず」は、高岡短期大学でたいへんお世話になった尾崎秀男教授の言葉です。日本人は協調性が強調されるあまり、集団凝集性が高く、個性を見失っています。また、バスケットボールは特に指導者の影響力が強く、今でも指導者が試合をしているのか選手が試合をしているのかわからない状態になりがちです。だからこそ、個々の選手が本当の実力をつけなければ、真の強さにはつながらないと考えています。

「個人主義」は「自分勝手」と紙一重です。仲良しチームである必要はありません。しかし、紳士淑女であって欲しい。それでも「子ども心」は忘れないで欲しい。多くの困難な壁にぶつかって欲しい。壁にぶつかるのを恐れてごまかしたり、悪知恵を働かせたり、ずる賢い大人にならないで欲しい。壁を乗り越えられなくてもいい。逃げ出さないで欲しい。そんなときに支え合えるチームであって欲しい。そして、壁にぶつかっていること自体に感謝しつつ、楽しめるぐらいになって欲しい。

エネルギーに満ちあふれた「洗練された素行と言動」がコート上に渦巻いたとき、あらゆる人々を感動に巻き込み、緊張感あふれるゲームが展開されるのだと、今でも確信しています。そんなバスケットボールを大人も子ども家族ぐるみで楽しめるような社会を一刻も早く実現したいと思います。

(2006年4月27日 茨城大学加藤敏弘)